

草庵 仏教

第222号
(発行日)
2008年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 真宗共学会 --- 毎月2日と
12日。午後7時より。
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

諸行無常と念仏

仏教の教えの根幹は古来から三宝印といわれ、それは、どのような説かれている仏教であつても、共通の根幹をなす教説である。

いわゆる「諸行無常・諸法無我・涅槃寂静」の三つの教えである。

その中の「諸行無常」というのは「諸行とはあらゆる現象」のことで、あらゆる現象は無常すなわち変化してやまない、それが諸行無常の道理といわれるのである。あらゆる現象は変化しづめであつて、一瞬も同じ状態に留まつていないという真理である。これは現代物理学の基礎的な法則でもある。あらゆる現象というものは、自己内外のあらゆる事象である。

外の世界の状態はまさに無常を感じざるを得ない。自然現象の変化もさることながら、世界の情勢は刻々と変化している。

時事評論家たちが将来を予測し、いろいろとテレビなど

でコメントを述べているが、その多くは現時点の明らかかな特徴を元にして、少し先の判断をしているだけで、あてにはならず、さまざまに変化する無常性についていけていない。

今日のサブプライム問題に端を発した世界同時不況の波は殆ど誰も予測しなかったのではなからうか。世界のトヨタの業績では今年の夏の利益は社の経営史上最高の利益を誇っていたが、世界同時不況と急速な円高による来期の営業利益の見込みは今年度前半に比べて一気に四割がた減るという。

とにもかくにも、世界は実に変動し移り変わつて止まらず、予測も難しいのである。それゆえ、私たちにとって世界は不安定きわまりないものと、感じざるを得ない。

そして、目を自己存在に転じるなら、諸行無常の道理は極めて身近な事実である。すなわち身と心の無常である。

身体は、いつまでも若くありたいという自分の願望にお構いなしに、五十歳になると五十歳の体になり、六十歳になると六十歳の体になつていく。さまざまな病気と回復とをくりかえしつつ、日々老化している。身の衰老はやがて死へと変化していく。

また、心も変化しづめである。喜怒哀楽はもとより、ひと思ひひと思ひ、変わり続けている。心のありさまは天気のように、晴れて気分がいいときもあれば、曇つてうつとらしい時もあり、なんともなく過ごすときもある。まことに無常そのものである。

自分にとって都合の良い状態を願ひ、都合の悪い境遇を避けようとする私たちにとって、世界も社会も、自分の身も心も、自分の思いに関係なく無常そのものであるから、自分の思い通りにはいかず、心理的につねに私たちは不安感や不足感を抱えて生きるほかはない。

さて、こういう不安な状態にいる私たちにとって、お念仏は何を意味するのであろうか。

私たちは、過去に生きていくのではないし、また未来に生きていくのでもない。いつでも生きていく事実は今より外はない。人生は今しかなく、今、今の連続でしかない。

そんな今に生き、今の不安に生きていく私たちに、阿弥陀仏は今、今と名のりたまひ、であいたまい、撰めとりたもうているのである。

阿弥陀仏は無常ならざる常なるもの、壊れることのない無為なるはたらきといわれている。いわば永遠無量なる真実である。

その永遠なるものが今この私に接し、私に喚びかけ、私をおさめとりて、私を離さず、私の究極の依り処(畢竟依)となりたもう。

それゆえ今ここよりない私の場合は、同時に無限なる大悲の阿弥陀仏が接したもう場である。

阿弥陀仏を我がまことの大悲の親としらせてくださるのがお念仏である。

このお念仏において、無常にして不安なる人生に変わらぬ大悲のまことを抛り処とさせていただくのである。

正信偈に学ぶ問答

(十一)

重誓名声聞十方

(書き下し)

重ねて誓うらくは、名声
十方に聞こえんと。

(現代語訳)

名号をすべての世界に聞こ
えさせようと重ねて誓われた
のである。

*

G 「重誓名声聞十方(重ねて
誓うらくは、名声十方に聞
こえんと)ということについ
て、お話しください」

D 「これは真宗の教えの中で
も非常に大事なところでは
す。それは「重ねて誓う」とい
言葉の中にも表れています。
法蔵菩薩が重ねて誓われたほ
ど重要な誓いという含みがあ
ります」

G 「なぜ、それほど重要な意
味がここにあるのですか」

D 「結論的にいえば、阿弥陀
仏が衆生と接触したもうとこ
ろ、阿弥陀仏が衆生とであ
いをもたれるところだからで

す。衆生の側からいうと、こ

こで私たちは阿弥陀仏とであ

うことができるのです。阿弥

陀仏が私たちとであいたま

い、私たちが撰め取ろうとさ

れる先端の場、その場を実現

したいと誓われたのでありま

しょう」

G 「阿弥陀仏が私たちに露わ

となる場がここなのですね」

D 「ええそうです。和讃に

如来の作願をたずぬれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまいて

大悲心をば成就せり

とあります。回向を首とす

るとは、如来は衆生に名号を

聞かせるのを先端とされるこ

とで、それによって、如来の

大悲心を衆生の上に成就(与

え)したもうのです」

G 「法蔵菩薩が重ねて誓われ

たその内容は経文ではどのよ

うに説かれているのですか」

D 「その誓いは、無量寿経に

おける四十八願の中の第十七

願ですが、その十七願の願心

をさらに重ねて誓われた重誓

らじ。

と誓われています。聖人はこ

の経文に重大な意味を読み取

っておられます。教行信証の

行の巻はこの経文を中心に展

開されたものだといつてもい

いと思います」

G 「それでこの経文のいわれ

を、聖人は重誓名声聞十方と

正信偈にあらわされたのです

ね」

D 「ええそうです」

*

G 「ではこの経文の意味を教

えてください」

D 「我、仏道を成るに至り

て、というの、我は法蔵

菩薩のこと。法蔵菩薩が修行

円満して仏道を完成するに至

れば、ということ。名声十

方に超えん、とは、南無阿

偈の中に明らかにして
おられます。それによ
りますと、法蔵菩薩は
我、仏道を成るに至
りて、名声十方に超え
ん。究竟して聞ゆると
ころなくは、誓う、正覚を成
らじ。
と誓われています。聖人はこ
の経文に重大な意味を読み取
っておられます。教行信証の
行の巻はこの経文を中心に展
開されたものだといつてもい
いと思います」

*

G 「名号と名声とは同じ意味
ですか」

D 「ええそうです。名号の
名は阿弥陀仏の名のり、号は
さけぶ。名のりさけぶ。阿弥
陀仏が私どもに名のりさけ
ぶ。名声は名となり声となつ
て喚びかける。南無阿弥陀仏
という言葉は、あたかも阿弥
陀仏がご自身を私どもに名の
りさけび声となつて喚びかけ
たまうがごとしのお心があ
るのではないでしょうか」

G 「阿弥陀仏は声でもつて衆

生に名のりさけびたもう、そ
れを阿弥陀仏の名号といひ名
声というのですね。」

G 「なぜ名声になられるので
すか」

D 「そのように声となつて喚
びかけることによつて、衆生
は阿弥陀仏の撰取の大悲に気
がつくからであります。衆生
は真実の言葉(仏の名号)
でもつて喚び続ければ必ず目
覚めてくれるとの法蔵様の確
信がおりなのでありますよ
う」

G 「それで、阿弥陀仏は音声
となつて私たちに働きかけて
くださるのですね」

D 「ええそうです。まじよう。
それに関して、平等覚経(仏
説無量寿経の異訳)には
善男子、善女人あつて、無量
清浄仏の声を聞き、慈心歡喜
して
とあり、また大阿弥陀経(仏
説無量寿経の異訳)にも

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(月)午後二時始まり

大谷大学名誉教授

幡谷 明 先生

まさに阿弥陀仏の声を聞く者は甚だ快し

とも説かれています

G 「そうすると、南無阿弥陀仏は声にまでなつて喚びたもう阿弥陀様なのです」

*

D 「ええ、声の仏となつて私どもに接触したもうのです。香樹院徳龍師のお言葉に、

色もなければ形もなし。選

択本願の無量寿仏、活き仏はこれじゃ。知りておるか。口

に出入りの南無阿弥陀仏。夫婦も娑婆限り、親子も娑婆一

世、五尺の体も娑婆の置き土産。尽未来際紫金蓮台に乗

りて、六十万億那由他恒河沙由旬の仏になる品物は口に出

入の南無阿弥陀仏。この南無阿弥陀仏に助られての往生じ

やと頂いて下向せよ。とあります。また松並松五郎

さんの歌に

よびづめ 立ちづめ 招きづめ 弥陀はこがれて あい

に来た そのお姿が南無阿弥陀仏

また、

称うるお声が 活き仏 喚ばれて居るとは 知らなんだ 不思議々々の南無阿弥陀

とありますが、どれも非常に

有難いお言葉です

*

G 「どうしたら、仏の声が聞こえるのでしょうか」

D 「それは如来法蔵様がすでお考えになつておられ、す

ぐには南無阿弥陀仏が仏の喚び声だとは衆生に知られぬゆ

え、何はともあれさまざまな業縁の中でお念仏を称えよ

と、称名念仏を私どもにお勧めになるのであります。そし

て、お念仏のいわれをよくよく聴聞せよとお勧めと聞か

せていただいています

G 「お念仏を称えながら、その思い召しをよくよく聞かせ

ていただくのです」

D 「ええそうです。一生はその相続のほかにはありません。その相続の中に、ひと声

のお念仏が（ここにいます、ついておるぞ、助けるぞ）の

仏心大悲のお喚び声と知らされていくのです

G 「道は一筋なのです。有難うございます」（了）

雑記帳

「死んだら終わりで無になる」という

考えは決して確かなものではない。そこで、「死んだら無になる」という考

えそのものを検討してみたい。それを今日の大脳生理学的な見地からい

え、心は物質である脳の活動から起こるものであって、心は脳の産物である

という脳一元論の見方である。脳一元論とは実際どのようなものであろう

か。脳一元論の考えをする学者で日本で有名な大脳生理学者であった時実利

彦氏の説がある。氏は『心と脳のしくみ』の中で「意識をはじめもろもろの

精神現象が大脳皮質で営まれていることは疑うことのできない事実である」

（p20）とし「大脳皮質と呼んでいる場所は、早くから発達している部分

（古い皮質）と新しく発達する部分（新しい皮質）の二つの部分から組み立て

られている。（新しい皮質）では、従来、大脳皮質の働きと考えられている

知覚や思考や判断や意志や感情などの、いわゆる知情意で代弁される高等

な精神が営まれており、これに対して、（古い皮質）では、食欲や性欲などの

欲求の心や、互いに相寄り相集まる集団性の欲求心や、さらに快感や不快感

で代表される情動の心のごめきや記憶のからくりなど、われわれの生命活動に直結した最も基本的な心が営まれ

ているのである。つまり、（新しい皮質）には理性、知性の精神が座をしめ、

（古い皮質）には本能的な心が座をしめているといえよう。そうすると、われわれの精神現象あるいは心の働き

は、（新しい皮質）と（古い皮質）という二重構造の大脳皮質によって演出

されている心の二重奏として把握されねばならないことになる。これが現在

われわれが理解している心の真の姿なのである。（p21）と述べている。

要するに心は大脳の営みであり、その演出であるという。あるいは「脳が、

高度に集積され、組織された多数の神経細胞の集団であり、その集団の営む

過程が心の働きである」（伊藤政男「脳と心を考える」p16）とか「脳は神

経細胞のただの集合にすぎないと考え、個々の神経細胞の物理的寄せ集め

が心を現わす」（脳と心を考える」p17）という。たとえて言うると、映写

機を回すとそれに従つてスクリーンに映像が映りゆく、映写機が止まると映

像も止まる。脳と心の関係を映写機とそれによつて現れる映像のようなもの

だというのである。そうすると、人間が死ぬ（脳死）と心の働きも停止（死

滅）する。こうして死んだら無になるという考えに必然的になるのである。

こういう説を脳一元論あるいは脳内現象説という。この考えは唯物論である

が、多くの脳科学者が考えている脳と心の関係であろうと思う。なぜなら、

自然科学者の傾向性として、どんな現

象も物質現象として捉えていこうというスタンスを持つからである。科学的

な態度とは対象を外から観測して、それを分析し、そこに法則性を見出し、

また見出した法則に従つて応用していくという営みだといえよう。だから心

というものも、それを対象化し、観測するとう場合、何を対象化し観測す

るかと言うときに、物質現象である脳の活動を対象的に観測し、それによつ

て心的現象を理解しようとする。

しかし、心は対象化できるのであるうか。心を何処まで対象化しても、対象化しているその当体が心であるか

ら、心自体は対象化できない。心は仏教では「不可得」いわば対象的に掴む

ことができないものとされるのである。脳の神経細胞（その束）の活動は

電氣的化学的の反応として観測されるが、そうした物質現象（分子の活動あ

るいは振動）と、実際に私たちが心で経験している内容、たとえば花を見て

美しいとか音楽を聴いて感動するなど

の経験とはあまりにも異質である。精神現象は多数の神経細胞の物理的な反

応現象に過ぎないという場合、そこに脳科学者の独断が入っていないとどう

して見えるのであろうか。彼らは物質現象については客観的なデータを駆使

しているが、それが私たちの心の経験と同じ事実をいうのであるという点

については、客観性を重んじる自然科学者であることを止めて、自分の主観的な推測を入れているといえる。



葉巻 2
(C)SHOGAKUKAN INC.

信心夜話

《松並松五郎念仏語録に聞く》十
太字は松並さんの言葉。

*

○後生大事と一歩ふみ出るお方もあるに、それさえ知らぬ私に、私を可愛と御慈悲の御手を、さしのべてくださった。自ら修業なさる御方もあるに、火宅に飛び込み、抱きかかえられて連れられる仏に、今逢い得た。この身嘆ずるに余りあります。

(阿弥陀様が私の後生を一大事となしてくださって、うろうろしアツプアツプするしかない私の処にまで飛び込んでくださって抱いて連れゆきたもう)

○悪い私と思わしてもらう事が、ざんげだと思っているが、悪い私と思つたから悪い私であつたのも無い。思うも思わざるも、元々悪い私である。こんな者のざんげは何になる。人も私も、私も人も、念仏聞く以外に、ざんげ、歓喜もある様に思っている。ざんげした後から、下からまた怒って居る。

(自分を悪いと思うから悪い人間なのではないし、悪いと思えないから善い人間なのではない。自分の反省によつて知られた自分は底の知れたもの。自分を悪いと思つたとしても、それがま

たあてにならない。次の日にはまたそこそこまじな人間だというような思いが起こる。自分が自分をどう思おうが、仏の眼に映っている私はもともと悪い人間である、とのこと。自分が自分を善人と思おうが、もとより煩惱具足の粗悪人なのである。自分がどういふものかを知らされるのは、自分の反省ではない、お念仏によつてである。(私が名を称えよ)の仰せのかけられていゝるものは極重悪人の外にはないではないか)

○世の中に、きたない物、よごれた物はない。我が心ほどよごれた、いやしいものはない。そのよごれた心は、お念仏に照らしい出されて、初めて知らされる。宗祖様は「無漸無愧のこの身にて」と、仰せられたのは、我が機に徹し照らし出された姿であり「親鸞一人がためなりけり」と、仰せられた姿こそ共に念仏に照らし出されたお姿であります。

自分の見えぬ処まで見抜かれて、照らしい出された総締が「地獄は一定住家ぞかし」と「かなしきかなや、たのもしきかなや」と、すでに光が身に満ちてござる。かかる身をと、お阿弥陀様は、御苦勞はのこらずなすとげて、あたえて、言わせて、信ぜさせて、助けると仰せられる。私の方から出すものは一つもない。ただ仕上の法を頂くばかり聞くばかり。阿弥陀仏のなしわざ業一つ。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

(私を丸々助ける功德を全て南無阿弥陀仏に仕上げ、それを与えてくださって称えさせ、称えさせて聞かせ、聞かせて信じさせて救いを成就したもう。まったく阿弥陀仏のなし業一つなのですね)

○腫物は、膿ばかりふいても、よくならぬ。その本、その根を出さねば治らぬ。南無阿弥陀仏。仏は、罪より罪を作り出すその元の悪業を救うと仰せられる。

(汝を救うといわれるのは、私の為すあらゆる罪を生み出す本の罪を除きたもうことなのでしたか)

○「日々の所作は、すべて仏の所作なれば、あらたまつて念仏するに及ばん」と言われるお方に会いましたが、念仏しましよと思ふ心まで私の所作でない。念仏いやいやと思ひながら、念仏の出で下さるのも、仏の所作であります。

(この言葉を松並さんから直接お聞きして、いやいやながらも称えようという思いまでもが阿弥陀様のお働きであつたかと御慈悲の手厚いことを一層知らされたことであつた)

○人は口に称名念仏して居る時だけを

念仏と思つている。夜昼、私にふりかえる、ふりかけられる、大御心の現れが口にもれて、南無阿弥陀仏と飛んで出るお念仏と、よう頂かぬ。くいちぎる。如来様の御念力、呼び声、さけび声、今私を貫き徹して、飛び出給うひびきが、口耳に聞えて下さるお念仏を、なぜになぜにくいちぎる。

(大行すなわち如来ご自身が称名念仏となつて口に出てくださる。そのような無上の宝のお念仏をくいちぎって、ろくろく称えない。くいちぎるどころか、お念仏を軽視し、無視して、あらぬところに仏や救いを探している)

○ご飯はいいやながら食べても、食べたのが本当なら、腹がふくれる。お念仏もその通り。

とかくむつかしき事を思わせざるは、次第相承の役目なり。されば助けて下されたとのむにあらず、助かつてくれよとある仰せに随うばかりなり。

(称え心はウソでも、称えられるお念仏は大悲の眞実そのものなるゆえに、やがて大悲が通ってくる。難しく考えねば助からぬなら眞宗ではない。それゆえ法の肝要は易しく説かれねばならない。それは、へこちらから助けてくださいとたのむ法ではなくて、まるまる助けるから助かつてくれよの大悲の仰せにしたがうばかりの至極単純な法である。だから愚かな凡夫も救われ

る

了